九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

https://doi.org/10.15017/458567

出版情報：九州芸術工科大学, 2003, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

第4章　考察

女性のライフサイクルにおいて，出産とそれに続く子育ては，母親へと移行していく過程であり，誰しも通る通常の発達段階である．しかし，子育てはしばしば，母親にとってストレスフルな出来事となりやすく，そのことから心理的危機（crisis）に陥ることがあると考えられる．そこで，出産後に，強い育児不安のあった40人の母親について36か月までの追跡調査により，「乳幼児への虐待」との関係について分析した．その結果，出産後1か月時に家庭育児において，乳幼児の身体的問題や育児の仕方に関する育児不安が生じていたが，その内容は一般的に多くみられる内容と思われた．出産後 10 か月時と 18 か月時には，上の子への対処方法の難しさや夫が協力してくれないことや，育児負担感がみられ，育児において強いストレスを感じていた．これは，乳児期早期に育児不安が生じ，その後，日常的に続く育児において増強したものと思われる．出産後 18 か月時では，上の子への対処方法の難しさを含めて，幼児の「聞き分けなさ」に対して母親が「かっとなり叩く」という衝動的な行動が生じていた．

「乳幼児への虐待」の発生が危惧された7事例について，事例毎にその経過を追ってみた．全ての事例が核家族で専業主婦であり，抑鬱傾向が高い母親であった．事例1～6では，出産後 18 か月時に叩く行為が生じたものである．子ども虐待は一度行うと繰り返すことが多いとされ，これらの事例においては1歳6か月児に叩く行為が実際にはどの程度のことなのか明らかではないものの，それが日常化した時に「乳幼児への虐待」に陥ることが危惧される．児童虐待防止法の定義では子ども虐待が不適切な養育の乱用（頻回に行う）としていることからもいえる（厚生省児童家庭局,2000）．事例1～6は出産後 18 か月において，「叩く」という行為が生じる以前に子育て上の困難に直面している．すなわち，出産後1か月で子育て不安や困難などの訴えがあり，10 か月では上の子への対処の困難さや複数児の育児の負担感がみられていたことからもいえる．こうした母親の子育て環境をみると，事例4や事例6では母親意識が低く，夫婦関係の親密度も低いもので，夫が子育てに非協力的で，子育ての困難感を夫が理解せず，母親は育児を一人で担うストレスを強く感じていることは明らかである．また，事例

3と事例5は母親意識が低く，夫婦関係の親密性も低いもので，父親意識は高いものの，母親が子育てについて夫と話し合うことが希薄であると推測される．これらの事例は，全て核家族であるため，父親の育児協力を勧めていくことが「乳幼児への虐待」の予防に繋がると考えられる．事例7は抑鬱神経症の既往があることから，出産とその後に続く育児により抑鬱傾向が増強したもので，実際に叩く行為はなくむしろ自傷行為が生じていると推測され，重度の育児ノイローゼにあると判断された事例である．この事例は夫や家族の関わりが最も重要と考えられるため，母親と父親に対して出産した病院と地域の保健所などの連携による専門的な支援を継続的に行うことにより「乳幼児への虐待」は予防できると考えられる（稲佐,1998）．次に，事例1と事例2は，叩く行為は認められるが，母親意識も夫婦関係の親密度も高く，父親意識や妻への精神的支援も高いため，幼児の成長に伴い父親の育児参加が多くなるならば，母親が一人で育児に向き合うことは少なくなり「乳幼児への虐待」に陥ることが予防できると考えられる．これらの母親は「叩く」という行為をしていることから「乳幼児への虐待」のグレーゾーンにあると思われる．その 18 か月時に「叩く」という行為を来たすまでのプロセスをみると，出産後の育児において子育てに強い不安や負担感・困難感が生じ，加えて長期に渡る 24 時間の育児に伴う疲労感から心理的危機に直面していたことは明らかである．母親は専業主婦であることから，母親に育児の比重が大きくなりやすいと推測される．父親と母親の共同作業による育児とは言いがたいと思われる．これらの事例を「母親への発達」の視点からみると健やかな状態ではないと考えられる．ただし，事例1，2，7は母親意識が全体の平均値より高値群にあるため，合計得点のみで「母親への発達」の良否を評価することはできないことがわかる．すなわち，母親に抑鬱傾向があることや，育児不安や負担感が強い時，叩くことがある時には注意して追跡する必要がある．こども虐待の実態については，最近，報告が多くなり次第に明らかになりつつあり，一旦発生すると予後は悪いとされ，有効な治療法はないというのが現在の実態である（日本子どもの虐待防止研究会,1999,2000,2001,2002）．子ども虐待が3歳までの乳児期および早期幼児期に発生したものは約2割を占める（厚生労働省,2002）ことからも，「乳幼児への虐待」に至るまでのプロセスにおいて，出産後から早期幼児期までの間で，母親が虐待の行為に陥る前に予防する必要がある（柳沢

,1997；小林,2000；松井,2001/2002)．すなわち，出産後の子育てにおいて「乳幼児への虐待」のグレーゾーンにある母親を早期発見し予防するための支援が最も必要だと考える．

母親の抑鬱や強い育児不安などに着目し，「乳幼児への虐待」に陥る前に予防するという視点からの先行研究には，母親の抑鬱や社会的サポートの少なさは，4歳までの「乳幼児への虐待」を予測する因子となる（Jonathan ら,1999)，子どもの性格が親の育児を決定する(Colette と Heerimann,1992)，母親の子育ての自信に子どもの気質に対する認識が影響している（Pridhan ら,1994)，子どもの気質の違いが育児の自信や抑鬱と関係している（Gross と Tucker,1994; Gross ら,1994; Jonathan ら,1999)などの報告がある．これらの研究では，母親の子育てには子どもの特性（気質や性格）が影響することがわかっている．母親に，乳児が低出生体重児（未熟児）や疾患のあるハイリスク児に伴う不安があったり，健常児であっても，強い育児不安や，育てにくさ，育児負担感などがある場合,継続的に育児相談などの支援を行う必要があると考える．「乳幼児への虐待」の発生は，子どもにとってのみならず，母親自身においても心理的苦痛を引き起こすことから，未然に予防できるよう支援することが重要と考えられている．4歳までの「乳幼児への虐待」のハイリスク要因を，新生児期に早期発見する必要性についての報告もある（Jonathan ら,1999)．

母親が抑鬱傾向や育児不安が強いなど，健やかでない状況において発見し，母親および父親・家族に対して適切な支援を行うことにより，「乳幼児への虐待」を未然に予防できるのではないかと考えている．

第VI部の小括

縦断的調査の経過の中で育児不安のある事例について出産後 36 か月までを追跡した結果，育児不安や育児負担感が出産後1か月にみられ，10 か月では増強し，18 か月では「かっとなり叩く」などの衝動的な行動が生じ，虐待のグレーゾーンに至っていた．母親に抑鬱傾向や育児不安が強いことがみられたり，「母親への発達」が健やかでない状況を早期に把握し，母親および父親・家族に対して適切な支援を行うことにより，「乳幼児への虐待」を未然に予防できるのではないかと考えている．

引用文献

Gross,D., and Tucker,S.(1994) : Parenting confidence during toddlerhood; A comparison of mothers and fathers, Nurse-Pract, 19 (10), 25-34.

Gross,D., Conard,B., Fogg,L., and Wothke,W.(1994) : A longitudinal model of maternal self-effecacy, depressin,and difficult temperament during toddlerhood, Res-Nurs-Health, jun,17(3), 207-215.

稲佐郁恵(1998) : 周産期からみた虐待発生予防, 助産婦雑誌, 52(8), 25-30.

Jonathan,B.K.,Dorothy,C.B., Vincent,D.and Jane,W.(1999) : Predicting child maltreatment in the first 4 years of from characteristics assesssed in the neonatal period, Child Abuse-Negl,Apr, 23(4), 305-319.

小林登 (2001) : 児童虐待および対策の実態把握に関する研究, 平成 12 年度厚生科学研究報告,249-266.

Colette ,J.L. and Heerimann,J.A.,(1992) : Parental division of infant care:contextual influences and infant characteristics, Nurs-research,july/august, 228-234.

厚生労働省 (2002) ; 児童相談所における虐待相談の処理件数, 平成 12 年度社会福祉行政業務報告, 394-399.

松井一郎(2001) : 虐待の予防, 早期発見及び再発防止に向けた地域における連携体制の構築に関する研究平成 12 年度厚生科学研究報告,6-10.

松井一郎, 谷村雅子(2000) : 児童虐待と発生予防, 母子保健情報,42,59-68.

日本子どもの虐待防止研究会(1999) : 子どもの虐待とネグレクト, 1(1).

日本子どもの虐待防止研究会(2000) : 子どもの虐待とネグレクト, 2(1),(2).

日本子どもの虐待防止研究会(2001) : 子どもの虐待とネグレクト, 3(1),(2).

日本子どもの虐待防止研究会(2002) : 子どもの虐待とネグレクト, 4(1).

Pridhan, K.F., Lytton D, Chang, A.S. and Chiu.Y.(1994) : Mothers

parenting self-appraisals:the contribution of perceived infant temperament, Res-Nurs-Health, 17(5),381-392.
柳沢正義(1997)監修：子ども虐待－その発見と初期対応－，財団法人母子衛生研究会，9.